

文化・芸術

「庭の柿」

1939年 油彩、キャンバス
53・0cm×45・5cm
(公益社団法人糖業協会蔵)

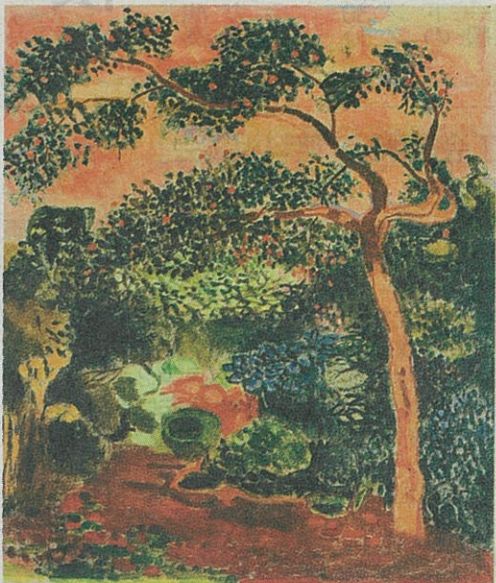
牧野虎雄 (1890～1946年)

第1章「自然をながめる―くつろぎの庭―より。都市の近代化は、都心の発展だけではなく、電車、道路など交通網のひろがりとともに、郊外への拡大をともなっていました。

とくに関東大震災(1923年)以後、昭和に入ると、東京では、それまで未開発だった土地が整備され、宅地となり、都心から人々が移り住むようになっていきます。その結果、郊外の家の庭は、日常生活と自然の野山との接点になりました。

画家の視線は、そうした庭の四季のうつろいに向けられていきました。たとえば、牧野虎雄は、この作品のように、繰り返し庭を題材にして、「日本的」油彩画と評されるような草木の布置などに文人画的な意識を加えて、平明な画風を築きました。

(田中)



《名画の扉》

大川美術館企画展「松本竣介《街》と昭和モダン展―糖業協会と大川美術館のコレクションによる」から